

農業高校における花育活動

公益財団法人全国学校農場協会 常務理事

千葉県立鶴舞桜が丘高等学校 教諭 風間 龍夫

はじめに

全国の農業高校は約380校あり、農業高校としての特性を活かし、さまざまな地域活動に取り組んでいる。そのなかでも、花いっぱい運動、花のまちづくり活動には多くの学校が取り組み、農場協会の例年の調査では3割程度の学校が行っていると回答しているが、近年では花育活動にも積極的に取り組む学校も増えている。今年度は、全国の農業高校の、花育という観点に立ち実践している花育活動の取り組みをいくつか紹介する。

(注 農業高校は農業に関する科目を学習する学校の総称で、農業関係高校というべきで、農業単独校、普通科等の他学科との併置校、総合学科校等からなる。)

1 北海道深川東高校(深川市)の事例

『ともに学び「青空園芸教室」ともに育む「草花活用」』

記載 教諭 村井 一幸

北海道知事認定フラワーマスター)

■ はじめに

本校は、平成17年に深川市内の2校(深川農業と深川東商業)が統合されてできた併置校である。現在、生産科学科(農業)・流通経済科(商業)・情報処理科(商業)の3学科で、農業と商業の特色ある教育活動を展開している。

深川市は北海道のほぼ中央に位置し、札幌市と旭川市を結ぶ交通の要所である。基幹産業は農業で、北海道内有数のコメどころである。また、ソバ・キュウリ・スターチスの生産量は全国トップクラスであり、さらにリンゴを中心に果樹の生産量も北海道内第3位となっている。

しかし、過疎化の波は厳しく昭和30年代には3万8千人いた人口も、現在は2万2千人にまで減少し、高齢化や農業の担い手不足の問題を抱える典型的な農村地域といえる。

本校は専門高校として、地域産業の発展に貢献できる人材を育成することが課題である。また、地域に根ざした学校として、地域を活性化させるための活動が期待されている。

専門教育の方針として、「地域の教育力を活用する」「地域の課題を取り入れた学習」を推進するために、地域連携『ともに学び、ともに育む』に力点を置いている。その中で、本校農業学習の主教材である草花を活用した地域連携の事例を2つ挙げる。

■ 1 青空園芸教室

<概要>

- ①主催組織：「深川市を緑にする会」(事務局深川市都市建設課)
- ②対象：深川市内小学生(2～4年生)120名程度
- ③対応：本校生産科学科3年生(生産科学科教諭・実習助手)
- ④場所：本校草花温室前



植え方の説明



クイズで学習

⑤時 期：毎年6月中旬（2回程度）1回1時間30分程度

⑥内 容

この活動は、地元の小学生に身近な草花や野菜に慣れ親しんでもらい、興味関心を高めてもらうとともに、本校生徒との交流を通して、コミュニケーション能力の向上を目指し、さらに自然科学分野における、学習意欲の高揚を目的としたものである。

また、本校生徒は、日頃の農業学習の成果を発揮する場として、小学生にわかりやすく伝えることの難しさを学ぶとともに、交流する楽しさを知ること、指導性の向上および広く地域に貢献できる姿勢を養うことが目的である。

学習は、まず本校生徒が先生（指導者）となって、身近な草花や野菜等の種類や生育特性について、クイズ形式で学習を進める。小学生が理解できる範囲で、尚且つ印象に残る（勉強になる）問題を作成するために、毎年苦勞するところである。しかし、これが本校生徒にとってはたいへん良い学習となる。

次に体験実習として、花・野菜のミックスプランターづくりを行う。花選びや土の量、苗を植える深さ、その後の管理方法についてアドバイスをしながら一緒に取り組む中で、交流が深まり、和気あいあいとした良い雰囲気の中で活動出来ている。



体験実習で花と野菜のミックスプランターづくり

■ 2 草花活用事業

<概 要>

- ①主催組織：「深川市フラワーマスター協会」（事務局深川市都市建設課）
「深川市環境衛生協会」（事務局深川市環境課）
「花彩通り商店街」（事務局深川市商工会連合会）
「NEXCO東日本」（東日本高速道路株式会社 北海道支社旭川管理事務所）他
- ②対 象：深川市内全域および本校生徒の出身中学校等
- ③対 応：本校生産科学科1～3年生（生産科学科教諭・実習助手）
- ④場 所：本校草花温室より各地域へ
- ⑤時 期：毎年5月～10月
- ⑥内 容

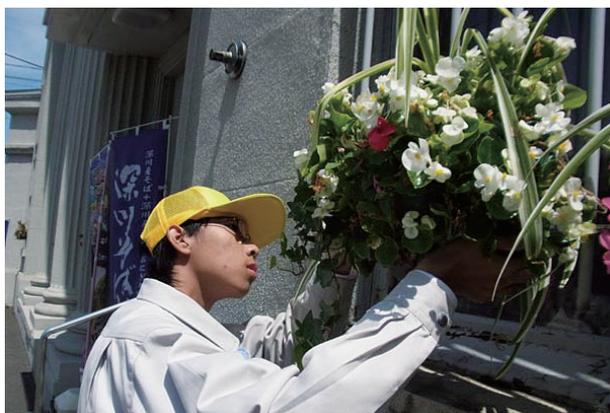


パーキングエリア花壇植え付け

地域環境緑化（美化）推進の奉仕活動として、毎年計画的に花壇造成やプランター・ハンギングバスケットの設置活動を行っている。また、出身中学校にその生徒が作ったプランターを近況報告のメッセージカード（本人の写真付き）を付けて届けている。

今年5月には、NEXCO東日本からの依頼により、高速道路道央自動車道音江PA（深川市）の上下線に、キンギョソウ・ガザニア・アルメリア等の苗を1,200本定植した。

また、6月から7月にかけて、市民の憩いの場である「プラザ深川」にベゴニアやインパチエンス・折鶴ランを中心としたハンギングバスケットやプランターを、約50基設置した。それに合わせて、JR深川駅前通り「花彩通り」にマリーゴールドやサルビアを中心としたプランターを大小合わせて60基設置している。



ハンギングバスケット設置



出身中学校用プランター

■ おわりに

これまでの活動に対して、今年10月に深川市環境衛生協会より、地域環境の美化推進に対する功労表彰を賜った。

また「北海道森と緑の会」主催、緑化活動啓発作品コンクール（標語の部）において、生産科学科3年石野泰誠さんの作品が、北海道最優秀賞・北海道知事賞に輝いた。

「広げよう 北に大地に 永久(とわ)の森」

日頃からの地道な取り組みや、地域緑化（美化）の意識づけの成果として、本校生徒たちの大きな自信と励みになっている。

以上が地域連携『ともに学び、ともに育む』における、農業学習の一部である。

しかし、真の目的としては、様々な地域活動を通して、郷土愛・奉仕の心・地域貢献の姿勢を養い、地域の発展に貢献できる人材の育成へとつなげて行きたい。

2 新潟県立新発田農業高等学校(新発田市)の事例

「地域に笑顔の花を咲かせたい」

記載 教諭 小川 智子

■ はじめに

本校は、県下有数のコシヒカリやアスパラガスなどの産地で知られる新潟県北部の新発田市にあり、「知行合一」（知識の体得と同時に、実践・実行しなければ、成果は上がらない）を校訓に掲げる明治43年創立の歴史と伝統がある農業高校である。3学科10の専攻があり、その中のフラワーデザイン専攻では、切花の栽培・フラワーデザイン・園芸福祉の3つを柱に学習している。近年は、フラワー装飾技能検定に専攻生全員合格、全国産業教育フェア「全国高校生フラワーアレンジメントコンテスト」で2年連続銀賞受賞など、資格取得や大会などにも積極的に挑戦している。

■ 活動内容

農業科目「生物活用」では、園芸の効果・活用としての園芸療法、園芸福祉について学んでいる。その知識を深める実践の場として、切花栽培とフラワーデザインの技術を活かして、3か所の施設との交流活動を実施している。また、各種イベントにも積極的に参加している。以下、それぞれの活動について紹介する。

活動① 病院・介護老人保健施設との交流

この活動の目的は、入所者の方々から草花と触れさせていただくことで心和む癒しの空間を提供すること、高校生が高齢者との交流活動を行うことで他者への思いやりの精神を養うことの2つである。11年継続で実施している活動で、毎年9月に専攻生20名と入院患者



病院との交流（フラワーアレンジメント）

と入所者合わせて24名程度で6グループを作り、グループ別にテーマに添ったアレンジメントを作成する。27年度の全体テーマは「花と過ごす楽しい時間 ～みんなで行こう! 年間行事旅行～」で、グループ別のテーマを「ひなまつり、入学式、お花見、海、紅葉、クリスマス」とした。各グループは、季節のイベントをアレンジメント作品で表現した。出来上がった作品はしばらく病院に飾られ、入院・入所者の心を癒した。

活動② 知的障害者施設との交流

施設から十数名で学校に来ていただき、年3回の交流活動を実施した。入所者1人に生徒2人が対応する形で、1回目は「コサージ」、2回目は「フラワーケーキ」、3回目は「カラー苔玉」の作成をそれぞれ行った。何をどの程度できるか、どうしたら喜んでいただけるかを試行錯誤しながらの交流会。時間が経つにつれて次第に会話も弾み、入所者の方にも生徒にも笑顔が見られるようになった。この交流会ではいつも、入所者の方が手づくりのお土産を持参してくださり、毎回楽しみにしていることが伺える。生徒たちはその想いに答えようと、作品制作からラッピングまでを精一杯サポートし、毎回、素敵な作品が出来上がっている。



知的障害者施設との交流（コサージ）



特別養護老人ホームとの交流（フラワーケーキ）

活動③ 特別養護老人ホームとの交流

授業だけではなく、自主的に活動をしたいと生徒から要望があり、近隣の老人ホームにお願いして放課後に活動を実施している。生徒と入所者と一緒に作成は行すが、入所者個々の部屋に飾ることができるように芝人形、フラワーケーキ、ハートのポプリケースなどを制作物に選定している。入所者はできることとできないことが人によって異なるが、多少時間を要しても楽しみながら満足できる作品にしてもらいたいと思い、制作の様子を見ながらサポートを行うようにしている。

活動④ 子どもたちとの交流

地域で開催される子どもたち対象のものづくり体験講座などのイベントに積極的に参加している。押し花の葉やコサージ、苔玉やフラワーケーキづくりなどの作品制作を通して、園芸の楽しさや利用法、園芸の持つ効果について伝えている。



地域のものづくり体験交流（カラー苔玉）



イベントのアシスタント（新潟GREENフェスタ）

活動⑤ 校外学習（研究発表、研修など）

生徒は、先進農家研修（切花、エディブルフラワー）やデュアルシステムへの参加、フラワーアーティストによるデモンストレーションのアシスタントを務めるなど、普段から様々な活動に積極的に参加して、知識を深め、技術を向上させている。また、普段の取組から園芸の持つ効果について多くの方に広く知ってもらいたいという思いから、新潟県の園芸福祉士養成講座の中で体験発表を行った。28年3月には、新潟市の食育・花育センターのイベント「春花・舞花」の中で、子どもたちからお年寄りまでを対象とした、草花を身近に感じてもらえるようなフラワーデモンストレーションを行う予定になっている。

■ 活動の効果と課題

生徒が自分たちで植物の持つ力・効果を発信したいと始まった園芸福祉活動は、外部と触れ合う機会が少なく変化のない施設での生活に、草花を通して心の潤いや身体機能低下防止に役立って欲しい、という願いを込めて活動がスタートしてから10年以上が経過した。施設の入所者には、植物を見る・触る・匂いを嗅ぐことなどで五感が刺激され、リフレッシュできるのではないだろうか。草花に触れたこと、高校生と活動したことで「若返った」と多くの方から言われたことから、心身の健康維持・改善に確かに効果があると思われる。

生徒たちにとっては、地域の社会福祉への様々な活動を通して、他人に説明したり教えたりすることで勉強になり、技術の向上やコミュニケーション能力の向上につながることはもちろん、考えながら工夫して行動することにより、主体性の育成にもつながった。また、他人を思いやる気持ちが芽生え、相手のことを考えて行動することができるようになった上に、他人に認められて必要とされることで、自分に自信を持つことができるようになった。課題としては、時間や経費が限られる中で、どのような内容で交流会を行うのか、今後さらに工夫していく必要がある。



園芸福祉士養成講座での体験発表



園芸福祉のワークショップ

■ 今後の活動

生徒にとっても地域にとっても、効果が大きいこの園芸交流活動を今後も継続し、さらに発展させていきたい。そのためにも、普段の授業で知識と技術を身に付けさせ、地域に積極的に働きかけながら実践し、専門性を活かしてより良い形で地域貢献できるように努めていきたいと考えている。そして、地域に笑顔の花が咲くよう、学校と地域が連携して発展していきたい。

3 岐阜県立恵那農業高校(恵那市)の事例 「地元保育園での花育活動」

記載 教諭 河島 隆浩

■ はじめに

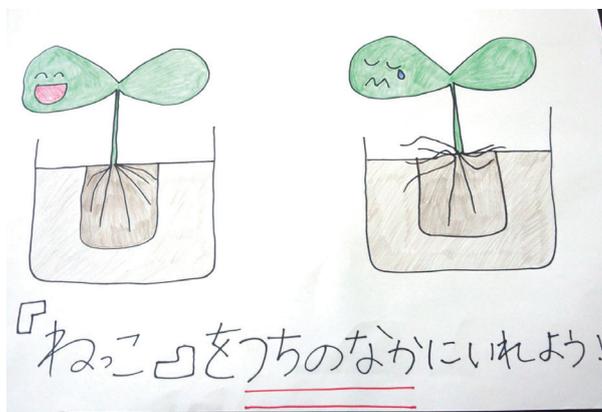
本校は、シクラメン栽培発祥の地とされる岐阜県恵那市に位置し、「花とほほえみとまごころのある学校」をスローガンに、園芸デザイン科、園芸科学科、食品科学科、環境科学科の4学科からなる農業の単独高校です。それぞれの学科が積極的に地域と連携した活動に取り組んでいます。

園芸デザイン科は、主に花壇苗の生産に取り組んでいます。生産した苗は、校内にある販売所で地元の方々に販売しているほか、恵那の玄関口でもある恵那駅周辺の道路脇の花壇や、観光地としても有名な恵那峡さざなみ公園に植栽をしています。また、園芸福祉活動にも力を入れており、市内の7か所の高齢者福祉施設に行き、入居者や利用者の方々と花壇の植栽やフラワーアレンジメントの制作実習などに取り組んでいます。

■ 活動概要



説明用画用紙



園児が記入した花育ノート

平成21年度より、課題研究の一環で、高校の近くにある「千草保育園」にて花育活動を開始しました。活動当初は、本校で生産した花壇苗を使用しての寄せ植え制作を行う程度でしたが、徐々に保育園での活動頻度を増やしていきました。また、対象園児も5歳児だけだったのを4歳児も対象とし、より多くの実習を行いました。

活動7年目を迎えた平成27年度は、4歳児8名を対象に「植物の成長を通して心豊かな子供たちを育てる」というテーマで取り組みました。その中で、フラワーアレンジメントの制作を目的に、園児が一から植物を育て管理し作品を制作するという取り組みについて紹介します。

■ 活動内容

活動は、すべて保育園内で実施をしています。最初に、その日の内容を説明しますが、要点を1枚にまとめた画用紙を準備し、気を付けることやポイントを確認しています。実習の後には、その日のまとめとして花育ノート（簡単な振り返りテスト）の記入をし、実習の内容や使用した植物の確認を行っています。植物の管理はすべて園児に任せ、灌水当番表を作成し、園児に責任をもって取り組めるよう工夫しています。

1) 播種

①花 材：ヒマワリ、アスター

②資 材：3号ポット、72穴セルトレイ

※セルトレイは、播種しやすいように24穴になるように切り分けておいた

③ポイント：人差し指の第一関節まで穴をあける・一粒ずつ穴の真ん中にまく

④園児の声：「この種見たことある！」「種がしましまだ！」「いつ芽が出るかな？」

⑤活動から：初めての播種で、植物の種をじっと観察する子や、丁寧に時間をかけて播種をしている様子が見られた。自分の名前が書かれたラベルを渡すと大事そうに差し大事そうに運んでいる姿が見られた。



播種の様子

2) 鉢上げ

①花 材：アスター

②資 材：3号ポット、割りばし

※割りばしは、苗を取り出す際に園児でも取り出しやすいと思い使用した

③ポイント：根をしっかりと入れる

④園児の声：「私の大きくなったよ！」「毎日ちゃんとお水あげたよ」

⑤活動から：前回の播種から、自分たちで責任をもって管理したことから、自分の苗を愛おしく感じている子が多かった。しっかりと鉢上げをしなければ大きくなると分かると、土をしっかりとかぶせるなど植物に対する思いやりの心が芽生えた。



鉢上げの様子

3) フラワーアレンジメント制作

- ①花 材：ヒマワリ、アスター、トルコギキョウ（本校で栽培したもの）
- ②資 材：ミニカップ（プリン容器ほどの大きさ）、はさみ、オアシス
- ③ポイント：花を斜めに切る
- ④園児の声：「切っちゃうの？かわいそう」「ヒマワリかわいい」「お母さんにあげる」
- ⑤活動から：はさみを使用させることから、慎重に実習に取り組んだ。1本切ったらすぐにキャップをさせるなど、ケガを絶対にさせないように注意した。自分たちで育てた花を切ってしまうことが「死んでしまう」と思い、植物にも命があり大切なものであるという気持ちを育ませることができた。また、自由にフラワーアレンジメントを制作させたことで、本当に楽しそうにどこに挿すかを考え、豊かな想像力を育むことができた。



フラワーアレンジメントの制作

■ まとめ

今回は、フラワーアレンジメントの制作について記載したが、これ以外にもマリーゴールド等を育て寄せ植えを制作したり、ワタを育てリースを制作する実習にも取り組んでいる。自分たちが育てた植物を使用して作品を作るということを一番大切にして取り組んでいる。それにより、植物をよく観察し、植物に親しみを持つことができ、命の大切さや思いやりの心、想像力などを育むことができているのではないかと思う。

保護者の方にアンケートを取った結果、「家でも水やりをするようになった」「買い物に出かけると花の名前を教えてくれる」「今日は農高のお姉さんと〇〇をやったよ！と楽しそうに話してくれる」などの意見をいただいた。保育園の先生方からも、「情操教育につながる本当に良い活動」と、好意的にこの活動をとらえていただいている。

保育園で管理をしてもらうため、先生方にかかる負担を減らす必要がある。出来るだけ育ちやすい植物を選び、多くの活動をすることが今後の課題である。



集合写真

4 滋賀県立八日市南高等学校(東近江市)の事例 「花を通して地域と交流」

記載 教諭 今崎 健治

■ 活動の概要

本校は、農業科・食品科・花緑デザイン科の3学科からなる単独農業高校です。「地域から愛される学校」また「地域に必要とされる学校」を目指して、各学科ともにこれまで様々な取り組みを地域と連携しながら行ってきました。また、そうした連携活動の中で、生徒の「コミュニケーション能力」・「課題設定能力」・「課題解決能力」等を醸成することを狙いとしています。

活動① 地元中学校における花壇整備活動

本校、花緑デザイン科では十数年前から東近江市立聖徳中学校の花壇整備を手掛けています。6月と11月の年2回、本校花緑デザイン科環境緑化材料班の生徒が花壇の設計・デザインを考え、その図面をもとに開催日当日には高校生が指導役となり、中学生やPTA役員の方々とともに約2,500本の各種花壇苗を定植していきます。



活動② 地元自治会と花いっぱい運動「SKサークル」

農業クラブの年間行事として年2回行っており、「SK」のSは南高校のSouthとKは地元春日町Kasugaの頭文字をとり命名されました。この活動は地元春日町を花いっぱいにするを目的に地元自治会とタイアップし、季節の草花をプランターに植え、歩道などに設置していきます。



活動③ 地元高齢者福祉施設における交流

本校花緑デザイン科環境緑化材料班において定期的に地元福祉施設を訪れ、入所者の方々と寄せ植えづくりなどを通して交流をはかり、「園芸福祉」の観点から花を通して、また高校生と交流することで高齢者の方々に元気になっていただくことを目的としています。この活動は、生徒が自ら企画して実行する形式で、事前に施設職員の方々と綿密に打ち合わせを行い、万が一の事故などに備え準備しています。そのなかで、生徒たちは「福祉」に関して様々なことを学習していきます。



■ 活動の効果と今後の活動

中学生との交流活動において、初めてこの行事を経験する2年生は、最初どのように指導すればよいか戸惑いながら、懸命に伝えようとする姿に初々しさを感じるのですが、さすがは3年生となるとまず中学生を落ち着かせるために自分の周りに座らせ、注目できる体制をつくってから指導を行うなど、以前の経験を生かして工夫する姿が見られます。

いずれの活動からも幅広い年代の方々と交流することにより、コミュニケーションのとり方を工夫する姿勢が見られます。また、地域が自分たちが育てた花によって美しくなっていくことに充実感や達成感が得られ、自信にもつながっています。

今後はこの活動をさらに充実したものにするため、生徒たちの柔軟な発想を大切にしていきたいと考えています。

5 兵庫県立播磨農業高等学校(河西市)の事例 「私たちの花育活動 ～花から広がる笑顔の輪～」

記載 教諭 西村 綾子

■ はじめに

本校は、地元加西市老人会の人達とともに草花を栽培し、市内の花壇を花でいっぱいにする「花いっぱい運動」を約20年続けている。それ以外にも地域に開かれた農業高校を目指し、さまざまな取り組みを行っている。「草花から多くの笑顔を広げる」という想いを、長期間引き継いで行う私たちの活動をここで紹介する。

■ 活動内容

- 1 地元老人会との「花いっぱい運動」
- 2 校内外での「フラワーアレンジメントや寄せ植えの講習会」
- 3 地元福祉施設での「園芸療法」
- 4 地元幼稚園での花育活動



■ 目的

- 1 地域の人達と一年を通じて草花を栽培し、花壇に定植することで、地元加西市を花でいっぱいにする。地域の人たちとの交流を行う。
- 2 多くの人に花育活動を知ってもらい、地域に開かれた学校を目指す。
- 3 介護が必要な高齢者の方たちに花を通じて療法を行う。
- 4 子供達と園庭の花壇を花で飾ることで、命の大切さを知ってもらう。

■ 方法

- 1 3月と8月に加西市花と緑の協会の人達(約400人)が来校し、市花である「サルビア」とハボタンのプラグ苗をポットに植える。約1カ月程度、本校生徒が育苗した後、老人会の人達が再び来校し持ち帰った後、それぞれの地域(約90団体)にある花壇に定植する。



2 毎年行われる販売会（神戸元町商店街）や本校での農業祭、地元の人達を対象にした農業に関する講習会、校内での母の日アレンジ講習会を実施する。販売会や農業祭では、お年寄りから子供までを対象にフラワーアレンジメントや寄せ植え講習会を開催する。農業に関する講習会は、春と秋の2回実施し、生徒達が栽培した草花を用いて寄せ植えを作成する講習会を実施する。母の日アレンジ講習会では、校内の生徒や先生を対象に、草花デザインコースの生徒が先生になってフラワーアレンジメント教室を開く。



3 地元の福祉施設の玄関前のプランターに、利用者さんと生徒が花を植える緑化活動を行うほか、施設内で生徒が加工したプリザーブドフラワーによるアレンジメント作成やリース・しおりなどを利用者さんと行い、園芸療法を行う。



4 地元の幼稚園の園庭にある花壇に、園児と本校生徒と一緒に一年を通じて花を植え管理を行う。花の説明や植え方、管理の仕方などを丁寧に教え、命の大切さを子供達に伝える活動を行っている。



■ 注意している点

- ・断片的な活動にならず、長期にわたって花の植え付けや管理を行う継続的な活動になるように心がけている。
- ・教員が誘導するのではなく、あくまでも生徒が主体になって計画し実施する活動になるように、事前指導（計画書作成や園との打ち合わせなど）と事後指導（レポート作成や活動発表など）に時間をかけている。
- ・販売が主になりがちであるため、アンケートを取ることや参加者の声に耳を傾けることに心がけている。

■ 効果

- ・生徒達が教える立場になるため、再度学び直し、考える機会になる。問題解決能力が養われる。
- ・生徒の地域理解、参加者の学校理解につながっている。継続的な花育緑化活動が、本校の教育理解につながっている。
- ・地域での活動を通して、生徒のコミュニケーション能力が高まり、責任感や自己肯定感が芽生える。
- ・なによりも生徒の草花への慈しみと愛情を深めることができた。

■ まとめ（今度の課題）

- ・アンケートの結果より、年代や地域ごとに好まれる花育が違うことということがわかった。活動ごとにテーマを変えて実施することを再考し、来年度以降の活動に生かしていきたい。
- ・活動費の不足や栽培管理時間の確保などが課題となっている。

6 愛媛県立丹原高等学校(西条市)の事例 「丹原高校の花育活動の取組について」

記載者 教諭 五百竹 司

■ 活動の概要

丹原高校は各学年普通科3クラス、園芸科学科1クラスの中規模校である。園芸科学科は、1～3年生全員で102名の生徒が在籍している。園芸科学科の大きな行事としては、毎年行っている4月の苗販売や10月の菊花展が有名で、地域からたくさんのお客さんが訪れる。特に菊花展は今年で第63回を迎える伝統行事で、毎年授業で3年生が懸崖菊、2年生が大輪菊、1年生が笠菊・ロケット菊・盆栽菊・福助菊を栽培している。前年の先輩が挿し芽などで育てた苗を、生徒たちは4月の定



菊花展

植を始めとして、毎日の灌水はもとより、芽摘み、誘引などの手入れを繰り返し、花を咲かせてきた。生徒一人ひとりが、菊と向き合うことで花を育てることのすばらしさを実感している。そのような素地もあり、地域への貢献にも力を入れて、多様な取組を行っている。

(1) 西条市老人クラブ連合会主催の菊づくり教室

昨年度より菊づくり教室を、本校の農場で4月から10月までの毎月1回土曜日に行っている。昨年度は計7回だったが、本年度は11月にも1回実施し、計8回行った。この教室は懸崖菊及び大輪菊、ロケット菊、福助菊の4種類を栽培し、その菊づくりに関する説明と実習を行う内容である。栽培中の鉢は園芸科学科で管理している。受講人数は20名程度で、募集については西条市老人クラブ連合会と西条市役所市民福祉課が西条市の広報で行っている。この教室の始まりは、同連合会主催の菊花展の出品数が年々減少しており、菊花展の活性化を図りたいとの相談があった。そこで、菊づくり教室によって市民の方々に菊づくりの知識や技術を学んでもらい、菊づくりの普及や促進につなげようと企画された。

表1 菊づくり教室の実施時期と内容

実施時期	内容
4月下旬	「菊づくりの基礎」土づくりと懸崖菊の定植準備
5月上旬	「菊づくりの基礎」大輪菊のさし芽と懸崖菊の定植
6月上旬	「菊づくりの基礎」懸崖菊の芽摘みと誘引
7月中旬	「大輪菊の定植」
8月中旬	「花芽分化期の管理」止め肥と予備摘心
9月中旬	「着蕾時の管理」懸崖菊の最終摘心
10月中旬	「開花期の手入れ」整形と輪台付け
11月上旬	「反省を次回につなげる」生徒との交流と芽の取り方

参加される受講者の方々は、西条市老人クラブ連合会が主催していることもあり、御高齢の方が多い。この会には本校の教職員だけでなく、生徒もボランティアで参加している。菊づくり教室の準備や片付けはもちろん、説明や実習の補助を行っている。受講された方々は非常に熱心に取り組まれている。作業によっては教室だけでは当然終わらないこともあり、農場に受講者の菊があるので、平日の午後に作業に訪れることもある。園芸科学科の生徒にとって、受講者の作品や取り組む姿勢は、とてもよい刺激となっている。受講者が栽培している菊の水やりは生徒が担当した。菊づくり教室で栽培した菊は、昨年度から本校と合同開催している菊花展に展示しており、出品数だけでなく、作品を鑑賞するお客さんも増えて喜ばれている。このように菊づくり教室を行うことで、西条市老人クラブ連合会主催の菊花展の活性化と、日本古来の菊づくり文化の継承につながった。さらに本校の学校開放にも役立てることができた。



菊づくり教室

(2) 西条地区青年農業者協議会主催の花育活動

本校では昨年度から、西条地区青年農業者協議会の3農家と花育活動を行っている。まず西条地区青年農業者協議会から、保育園での花育活動を合同で行いたいとの申し出があった。そこで、保育園で花育活動を行う前に、高校生が先に多肉植物とバラ栽培園地の見学及び多肉植物の寄せ植えやフラワーアレンジを行い、農家が行う花育活動を体験した。その後、保育園で農家の方の説明の後、生徒が園児と交流し、づくり方を教えながらバラのフラワーアレンジメントを制作した。なお、この花育活動にかかる材料は、すべて西条地区青年農業者協議会が準備してくださった。おかげで、普段は費用の関係で体験できないバラのフラワーアレンジに関する知識や技術の向上を図ることができ、さらに地域の草花生産農家を見学することで、草花生産に関する栽培の知識を身に付けることもできた。また、保育園と交流しフラワーアレンジを教えることで、学んだ技術の深化を図ることができるとともに、園児たちとのコミュニケーション能力の向上に役立った。



保育園花育活動

(3) 愛顔つなぐえひめ国体・えひめ大会に向けての花づくり

2017年に愛媛県で「愛顔つなぐえひめ国体・えひめ大会」が行われる。そこで、愛媛県えひめ国体推進局国体総務企画課からの依頼を受け、10種類の推奨花の栽培を行った。今年度は花いっぱい運動検証実験で、合計480株を栽培し、市町国体担当課の方を通じて、小学校と中学校に花のリレーを行った。また、西条市国体推進課から国体PRのための花装飾品の依頼を受け、本校の園芸科学科が20年前に製作したフラワーゴーランドを復活させた。フラワーゴーランドは回りに国体PRの文字やみきゃんの絵が入っており、ドーム型で回転し、自動で内側から液肥を噴霧して長く外側に植えた草花が観賞できるようになっている。これを本校の菊花展で展示し、本校が栽培した花苗を西条市国体推進課がプレゼントして国体PRを行った。えひめ国体競技普及促進事業西条市ソフトボール少年女子交流大会でも、このフラワーゴーランドとともにプランターや多肉植物の寄せ植えを展示した。また、開会式では、県外から参加した8チームを含む計11チームに、本校が製作した多肉植物の寄せ植えを贈呈した。



フラワーゴーランド

(4) 多肉植物の寄せ植え講習会

本校では平成19年から多肉植物の栽培を開始し、現在では70種類ぐらいが育っている。ぶにぶにと見た目が可愛いことや、乾燥に強く観葉植物などに比べて手入れが簡単という理由で、近年は若い女性にも人気がある。本校ではこの多肉植物を使った寄せ植えづくりの講習会を、地域のイベントや公民館、小学校などで精力的に行っている。公民館の講習会は、土曜日に実施しており、生徒たちはボランティアで参加している。



寄せ植え講習会

生徒たち一人ひとりが挨拶を行った後、多肉植物についての説明を加えながら、プロジェクターを使って手順に沿って材料を提供し、寄せ植えを行っていく。一つ目が完成すると二つ目は受講者に材料を渡し、自由にオリジナルの寄せ植えづくりを楽しんでもらっている。同じ材料で作っても、どれ一つとして同じ寄せ植えがなく、個性あふれるすばらしい作品が制作できるのが寄せ植えづくりの魅力でもある。また、講習会の最初に、受講者の方々に意見発表やプロジェクト発表を行い、農業クラブ活動のPRの場としても活用している。4月当初の講習会では、初めて講習会に参加する生徒たちは、挨拶や指導するとき、恥ずかしそうに慣れない手付きで取り組んでいたが、回を増す毎に知識や技術も身に付き、自信に満ちた言動がとれるようになった。受講者とのコミュニケーション能力も高まり、成長していることが伺える。公民館の受講者の方からは大変な人気があり、12月にも冬の寄せ植えづくりを依頼されて取り組んだ。これらの活動以外にも西条市の文化会館や他の施設のプランターの花づくりを行っている。また、近隣の小学校の花壇づくりなどの交流も行っている。花育活動は、地域の方々に草花の魅力をPRして普及させるだけでなく、生徒たちの活躍の場であり、地域と密接な関わりを持てる貴重な活動であることを実感している。

表2 多肉植物の寄せ植え講習会

実施日	イベントまたは実施場所	実施日	イベントまたは実施場所
4/19	とうえんまつり	8/19	吉岡小学校（教職員）
5/3,4	愛媛花まつり	8/22	田野公民館
5/16	東高祭&バラ鑑賞会	9/13	田野地区敬老会
5/24	ふれ愛フェスティバル	9/19,20	周ちゃん広場
7/22	丹原小学校下町PTA	10/10	周ちゃん広場
7/25	周布公民館	9/28	丹原小学校（5年生）
8/1	丹原公民館	10/18	田滝地区収穫感謝祭
8/6	丹原小学校（教職員）	11/1	緑のチャリティバザール

おわりに

今年度は、全国の農業高校の、花育という観点に立ち実践している花育活動の取り組みをいくつか紹介した。前年度まで紹介した、農業高校の地域を花と緑で飾る、花いっぱい運動、花のまちづくり活動と内容が若干重なるところもあるが、地域の人と花を介して交流する内容が主となっている。活動内容は草花の寄せ植え、プランター栽培、鉢栽培、フラワーアレンジメント、コサージュ、花壇づくり等と多岐にわたっている。対象者も、園児、小学生、中学生、地域住民、老人等と幅広く、活動場所は自分達の学校だけでなく、保育園、小中学校、公民館、福祉施設、病院、地域イベント会場等の外部に出向くことも多い。活動形態は、生徒が指導役となり懇切丁寧に教え交流し、生徒が人前で説明したり、クイズ形式にするなど趣向を凝らし、活動の効果的な進め方を研究し実践している。

活動の取り組み状況は、写真でも分かるように、生徒、参加者ともども、みな笑顔で生き生きと取り組み、花育が「花や緑をとおして、命を育み、やさしさや美しさを感じる気持ちを育む」ということがまさによく理解される。農業高校の花育活動の特徴は、農業高校生が地域の人たちを対象に、生徒自らが、工夫しながら主体的に取り組んでいることである。各執筆者が述べているように、花育活動の効果は生徒にとって、学習したことを確かなものとし、人のためになるということで学習意欲を高め、成就感、達成感を持たせることができる。さらに、人とのふれあいをとおして、コミュニケーション能力を高め、社会性、人間性の涵養に効果があるものと思われる。

農業高校の学習では、草花栽培の知識と技術を学ぶ科目「草花」とは別に、「生物活用」という科目がある。これは園芸作物や社会動物の活用により、いかに生活の質を高め心豊かに生きていくかというヒューマンサービス系の科目である。草花を栽培するだけでなく、利用・活用する立場に立つ科目で、フラワーデザインや園芸装飾等はもちろん、園芸療法や交流活動プログラム等の学習項目もある。花育活動は、まさに「生物活用」の目標を具現化していくには最適の活動と思われる。

皆さんには、今後とも、全国の農業高校生が取り組む花育活動にご注目いただければと存じます。